みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

動物描写から「人と動物」を再考する＜共同研究：「描かれた動物」の人類学：動物×ヒトの生成変化に着目して＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 未花子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009692

共同研究 「描かれた動物」の人類学―動物×ヒトの生成変化に着目して（2020−2022年度）

動物描写から「人と動物」を再考する

文・写真　山口 未花子

動物について論じる

動物について論じることは洋の東西を問わず古くからおこなわれてきた。このなかで繰り返し論じられてきたのが動物とはどのような範疇に属するのかを、とくに人間との比較から議論するというものであった。たとえばアリストテレスは魂をもつものを動物とよび、そのなかでも人間は発話や思考能力をもつ政治的存在であるとして特別視した。あるいはハイデガーによれば、石には世界がなく、動物には世界はあるが貧困であり、人間は世界をつくり出すことができる存在であるという。こうした一連の議論は、身近な他者である動物と対比することで人間という存在の独自性、そして多くはその優位性を明らかにしようとしてきたといえる。

人類学においても動物は大きなトピックであり続けてきた。ただし哲学とは少し違った視点、すなわち動物が人間社会のなかでどのような役割を果たしているかに重点が置かれてきたといえる。エバンズ＝プリチャードの描いたヌアーにおける去勢牛やメアリ・ダグラスのセンザンコウなど、動物を論じた民族誌は枚挙にいとまがない。こうした古典的な民族誌において、動物は、資源あるいは思考するための道具として位置付けられてきた。

しかし近年になってこうした人間中心主義的な動物と人の二元論に異議が唱えられるようになり、人類学においても存在論的転回やマルチスピーシーズ民族誌といった分野が脚光を浴びるようになった。これらの議論のなかでしばしば動物がとりあげられ、人と同じような主体性や人格を動物に認めることによって人間中心主義を乗り越えようとする試みが積み重ねられつつある。

カナダ先住民と動物

筆者はこれまでカナダ先住民カスカが動物との駆け引きによって狩猟を成功に導く様子や守護動物霊との対話、そして狩猟した動物の魂から肉体を再生させる儀礼など、人格をもつ動物との互酬的な関係に焦点を当てて研究してきた。そして、動物との交渉を通じて人と動物の連続性が紡がれる様子や、動物に大きく依存し、日常的に関わることと独自の動物観が分かちがたく結びついていることが明らかになった。しかし同じ地域で同じ様式で狩猟採集活動をおこなってきた内陸トリンギットは、カスカの人びとがおもに物語や歌によって動物を描写するのに対して、踊りや音楽はもちろんのことだが、カスカにはみられないような彫刻や絵画などを活発に制作し、儀礼や日々の生活のなかで活用している。とり巻く自然環境や動物との関係がこれほど類似しながら、しかも近接する集団でこれほど動物描写が異なるのはいったいなぜだろうか。

狩猟採集民の動物描写が一様ではないことについては、すでにティム・インゴルド（2000）による考察がある。これによると、トーテミズム的な世界観をもつアボリジニは動物を特定の象徴的な型や配置に基づいて静的に描き、動物がトーテムの物語に還元されるような様式がみられるという。一方で北方狩猟民に代表されるアニミズム的な動物の描かれ方はどちらかといえば個人の観察に基づいた写実的なものであり、動物と人それぞれが織りなす物語は動的で型にはまらない。その背景にはトーテミズムにおける象徴的な動物との関係が生得的に決まるのに対し、アニミズムでは個々の人が生きるなかで多様な動物との関係を結んでいくという違いがあるという。

たしかにカスカと内陸トリンギットとの違いには、アニミズム型とトーテミズム型とインゴルドが名付けたような動物との関係の違いがあるように映る。内陸トリンギットは、そもそもその成立過程においてトーテミズム的な世界観をもった海岸トリンギットが内陸に進出してカスカを含む内陸アサバスカン系の人々との婚姻などを通じて交わってきた歴史があり、1つの集団のなかにトーテミズムとアニミズムという2つの側面を維持しているのかもしれない。しかしながらインゴルドが狩猟採集民とは異なる世界観と芸術様式をもつとした近代西洋社会に属するカナダ市民でもあるという側面をどうとらえればよいだろうか。また、インゴルドは視覚芸術のみを分析の対象としたが、音楽や踊り、物語やファッション、映像における動物描写も同じく重要である。私たちが知りうる最も初源的な芸術の１つである洞窟壁画をみても、動物が描かれた同じ場所で、歌や踊り、ストーリーテリングが混然一体となって繰り広げられていたであろうことは想像に難くない。

本研究ではインゴルドが切り拓いた「描かれた動物」から人と動物をとらえなおす試みをさらに進め、動物描写をその形式にとらわれず、また時代や社会の違いを横断する形で検討することで人が動物に出会うことで何が生まれるのかを考察していく。

情動と生成変化

この問題にとりかかるうえで参照したのが、ジル・ドゥルー

カナダユーコン準州の内陸トリンギットの町に設置されたトーテムポールとペイントされた店舗。オオカミやチーフ、シャチ、サメが描かれている（2018年、カナダ・ユーコン準州）。

山口 未花子（やまぐち みかこ）
北海道大学文学研究院准教授。専門は人類学、動物人類学、北米先住民研究。著書に『ヘラジカの贈り物―北方狩猟民カスカと動物の自然誌』（春風社 2014年）、共編著に『人と動物の人類学』（春風社 2012年）などがある。

ズとフェリックス・ガタリの著作『千のプラトー』の10章である。ここでドゥルーズとガタリは動物と人の「あいだ」に生じた情動に導かれて生じる生成変化としての芸術作品について論じている。そして、人間はともすれば領土のなかにこもって下から上へ積み上げるように世界を作ってしまう（領土化）が、たとえばマイナー性をもつ存在、男性なら子供や女性、動物になること、によって脱領土化を果たし、知覚しえぬものを知覚できるようになるとした。ここでいう動物になることとは、人が動物という別の存在へと自らの可能性を拓いていくことと言い換えることができるかもしれない。ドゥルーズとガタリはその事例として、たとえば狩猟者が動物になるということは、動物の知覚や行動様式を自分のものにして獲物に接近することだという。そこでは、人間は動物とのあいだで、サーファーがうまく波をとらえて波乗り続けるような状態を維持することが求められる。それに失敗すると動物の知覚から人間の知覚へと戻れなくなってしまったり、逆に我に返って動物の痕跡を見つけられなくなったりして、生成変化は止まってしまうという。このように生成変化を生じさせることはけっして簡単なことではないが、領土化された人間の世界に閉じこもっていては見ることのできない世界を知覚する可能性をドゥルーズとガタリは示した。自分と対象とのあいだに生起するものを見つめるという視座は人類学においても重要なものである。生成変化の概念に影響を受けた一人であるインゴルドは「人類学は誰かとともに研究し、そこから学ぶことだ。人生の道を前に進み、その過程で生成変化をもたらす」（2017: 19）という。さらにインゴルドはアートを「人間存在の内側から知識を成長させてくれる人類学と共通の関心をもつ領域」（2017: 29）とみなす。

本研究ではこうした議論を下敷きとして、人と「ともに」（インゴルド 2017: 19）その場をつくる動物とのあいだに生じる生成変化としての動物描写を「内側から知る」（インゴルド 2017: 22）ことを目指す。検討する事例は、人類学者がフィールドで記録したり修得した動物描写、博物館の標本、大学生の生物画、想像上の動物、文学作品そして描き手による動物描写の実践そのものも含め多岐にわたる。これらをワークショップなどの手法もとりいれながら動物を／で／と／描く過程に注目することで、描き手の生成変化や情動の現われ方、動物と描き手との間身体性や、なぜ動物がそうした作用をもたらすのかという点について検討する。ただし全ての描かれた動物が生成変化によるものではない点にも留意する必要がある。そこに動物によって突き動かされた情動の痕跡のようなものがあるかないかを明らかにすることも必要だろう。

共同研究のメンバーは、動物とのあいだに生じる情動とそこから描写が生成する場面についての研究（認知芸術学、人類学、生物学、比較文学）をする者と、動物を描く（画家、作家、詩人、ダンサー、工芸家、展示実践）専門家である。また、メンバーの多くが複数の領域に関わる活動をしており、領域横断的に研究と実践のどちらにもアプローチできるという強みをもつ。

さらに「描かれた動物」と人のあいだに生まれるものにも目を配る必要がある。レヴィ＝ストロースは狩猟採集民だった人間が動物との連続性を漠然ともち続けているために「すぐ後にはもう過去のものとなったと悟らされるその一体感へのノスタルジーを、ごく幼い時期から子に抱かせておかねばならないとでもいうかのように、われわれはゴムやパイル地でできた見せかけの動物でまわりを取り囲んだり、最初に与える絵本を目の前に置いたりして、本物に出会う前から……動物を見せるのである」（2019: 203）と述べる。しかし絵本などに「描かれた動物」はレヴィ＝ストロースがいうような、一瞬のノスタルジーをもたらすだけに与えられるのだろうか。じつは先に紹介した内陸トリンギットは海から遠く離れて暮らし、見たことさえない人もいるのに、さまざまな海の動物を描く。あるときそのことを友人の彫刻家に尋ねると、自分の祖父が寝る前に話してくれた海の物語によって、日常的に狩猟するヘラジカやビーバーと同じくらいシャチやサメにも親しみを感じるようになったと答えた。「描かれた動物」すなわち動物の物語が、見たこともない海生動物との親密さを形成する役割を担っていたのだ。本研究ではこのように、描かれた動物が人と動物のあいだを開く可能性についても議論の射程に入れていきたい。

引用文献

レヴィ＝ストロース，C. 2019『われらみな食人種―レヴィ＝ストロース随想集』泉克典訳，大阪：創元社。
Ingold, T. 2000 Totemism, Animism and the Depiction of Animals. *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. London: Routledge.
インゴルド，T. 2017『メイキング―人類学・考古学・芸術・建築』金子遊・水野友美子・小林耕二訳，東京：左右社。
ドゥルーズ，G. ／ F. ガタリ 2010『千のプラトー―資本主義と分裂症』宇野邦一他訳，東京：河出書房新社。